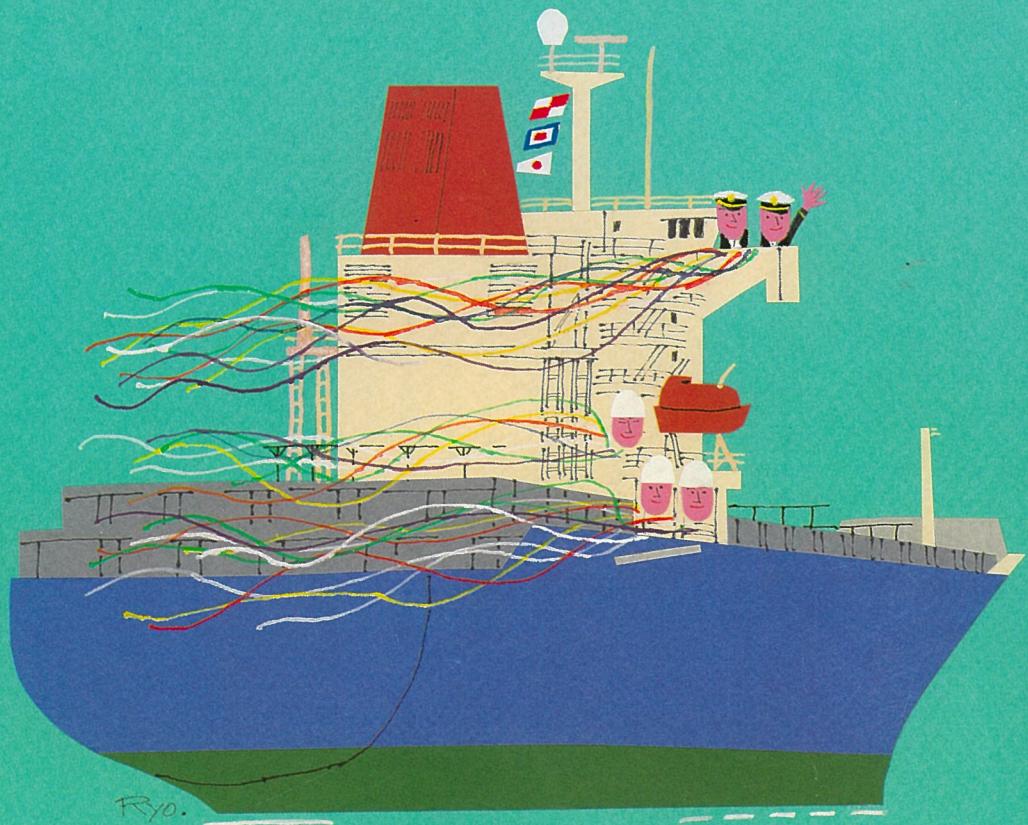


一九五八年四月三日第三種郵便物認可  
一九九六年四月一日発行(毎月一日発行)第五六二号

# 図書

特集: 読書 新しいスタート

4 1996



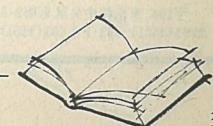
岩波書店

# 読まなくても読書

知識を得るだけでなく自らを知るために

西

和彦



一九七四年の四月に私は東京の駿台予備校に入学し、浪人生活を始めることになった。駿台予備校には千葉県の下総中山に学生寮があり、私は四人一部屋で三人の仲間達と一緒に受験勉強に再挑戦することになった。

予備校のテキストと辞書とノートで四月は始まつたが、東京に慣れ、授業に慣れてくると文庫本や新書本をわれわれはむさぼり読んだ。同室の友人が新しく買ってくる本の回し読みをし、皆がそれぞれ意見を言い合い、大学に入学したらあの本も読みたい、この本も読みたいと言い、しかしそれのできない浪人の身の上の悲しさを自分たちで勝手に嘆いていたりした。

ある日同室の友人である妹尾君が「どうも近いうちに岩波文庫と岩波新書が値上がりになるらしい」ということを聞きつけてきて、「おい、岩波文庫を買いに行こう」ということになり、皆で隣の本八幡の駅の近くの大きな本屋に買い出しに行つた。われわれは結局岩波文庫と岩波新書をそれぞれ百冊以上買い占めて帰つて来た。一八歳の少年にとって、この経験は生まれて初めてのことであつた。本屋の本棚に並ぶ本の中からいつかは読みたいと思う本を手当たり次第に買つていった。その年までこんな経験はしたことがなかつた。そういうとんでもない買い物をして帰つてきたわれわれの顔はにこにこ顔であった。

受験が目の前に迫つてゐる受験生といふ立場で考えると、入試の邪魔になるような本は読まないで合格までがまんしなくてはいけないという気持ちもあって、一週間に一冊だけ本を読むということに申し合わせた。残りの本は目に入ると目障りだといふ部屋に帰つて買つてきた本を並べながら、戦利品の見せびらかし合ひをした。友人達の興味の対象と自分の興味の対象が完全不同ののだなということを知つて驚くとともに、自分がまだ知らない、見たこともなく聞いたこともない著者が書いている本が面白そなことがわかつて、結局もう一度出直して買いに行くことになつた。

た加藤君は大学の教職にあると聞いた。若

い日の読書やそれにまつわる経験はその本を読む人の未来に大きな影響を必ず与えることになる。

(にしかずひこ・株式会社アスキー)

ことになつて、不謹慎な話だがベッドの布団の下に敷くことにした。私は數カ月の間であるが、岩波新書の上で寝起きしていたことになる。毎日ベッドにはいるとき、合格をして毎日一冊でも二冊でも好きなだけ本が読める日を楽しみに、その日が早く来ることを祈つた。

本を一度にたくさん買う喜びを知つてしまつたことが私の読書を、人生を大きく変えることになつた。あの若い日から二二年が経ち、私は今年四〇になつた。年とともに私の蔵書の数は増え続け、書庫が大きくなり続けた。私は四〇になる前に自分の買つて読んだ本やまだ読んでいない本をカテゴリ別に細かく分類がしたかった。まとまつて時間がとれなかつたり、スペースが足らなかつたりして、皆に手伝つてもらつて約二年ぐらいかけて数万冊の本を分類することができた。日本十進分類のように自分の興味の分類がまとまつて完成したときに何かほつとするような、長年気になつていたことが解決したという安心した気持ちになることができた。その分類を見ている

と、なるほど自分の頭の中はこうなつているのかと自分で自分のことを面白く不思議に思つたりした。この分類が契機になつて私の読書量は再び増え始め、毎日が楽しくてしかたがなくなつた。

本を分類することで得られる一番大きな収穫は、「自分を知る」ということである。驚くべき沢山の人が自分の興味の対象と自分の性格の本質的な部分を知らないでいることが多いのではないかだろうか。他人の批評は比較的たやすいことであるが、自分の評価は困難である。そのことが持つてゐる本を分類することによつて可能になる。だから私はこの蔵書の分類を試みられることが強くお勧めしたい。

卒業祝とか入学祝とかでまとまつたお金が手に入つたら、大きな本屋に行つて今読まなくてもいつかは読みたいという文庫と新書を山ほど求められることも強くお勧めしたい。若い時にそのような体験をすることがのちのちの人生にどのような大きな影響を与えるのかという一つの例が今の私である。同室の友人の妹尾君は外交官に、ま

